

國學院大學學術情報リポジトリ

反復と変形の文字：近代小説における準拠の方法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安西, 晋二, Anzai, Shinji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002421

平成二六年九月

博士学位申請論文要旨

「反復と変形の文学」

——近代小説における準拠の方法——」

國學院大學文学研究科

安西晋二

本研究は、文学作品が、典拠をどのように運用しているかという準拠の方法を追究するものである。文学作品が何らかの典拠を用いて創作されるというのは、決して特別なことではなく、作品は、さまざまな過去の蓄積や影響関係から成り立つ。ただし、影響関係の多寡やその陰影の濃淡は、特定の文学作品の価値とは無関係である。翻案や引用といった、概念あるいは文面において先行テキストとの共同性が高い形態であろうとも、それに変わりはしない。典拠との間には、言表行為における思索の痕跡として、一致と差異とが存在しているよう。特に差異は、典拠が、読み換えられ、そして書き換えられていった結果の産物である。だからこそ、差異は、典拠の運用から新たなテキストが生成された方法を問直す鍵となるはずであろう。よって、具体的には、明確な典拠の使用を前提とする翻案および引用を検討の対象とする。

引用について、「この反復は、第一の文面に付加された変形に他ならない」とアントワーヌ・コンパニオンが述べているように、翻案も引用も、ともにテキストにおける反復／変形の帰結である。反復は、概念的あるいは文面的な変形を現象として、典拠との差異を生み出す。つまり、本研究の射程は、反復／変形のプロセスから明らかとなる、テキスト間の差異にある。

また、パロディも引用や翻案の方法に通じ、反復／変形をより包括的に分析するうえで有効に働く観点だと考えられる。そもそも翻案・引用・パロディは、部分ないしは全体の改変であり、典拠の文脈からの逸脱にほかならない。そのため、根本的な志向において、反復／変形は、典拠に新たな意味を付与し、元の文脈からの逸脱や改変を企図すると換言できる。これは、リンダ・ハッチオンが指摘した、「類似よりも差異を際立たせる批評的距離を置いた反復」「様々な約束事との皮肉な戯れ、批評的距離を置いた拡張的反復」というパロディの特徴にもつながっていく。ゆえに、文学におけるパロディ研究の蓄積は、示唆に富むのである。

方法としてのパロディという観点に立ち、反復／変形のプロセスを解明する試みは、典拠が、異なる創作において、いかにして新たな意味や価値を与えられているのかを探究するための緒になる。そこで本研究では、反復／変形、パロディをキーワードとし、全三部となる構成で準拠の方法を考究する。

まず本論第一部「準拠の構造とパロディ——澁澤龍彦の方法——」では、澁澤龍彦の小説における典拠の運用方法を析出した。澁澤の創作の多くは、複数の典拠が複合的に用いられている。これらの検討は、本研究のコンセプトとなる、基本的な準拠の構造を提示する役割を果たさだろう。第1章「パロディとしての自意識——「撲滅の賦」における準拠の構造——」では、澁澤の処女小説「撲滅の賦」を論じる。埴谷雄高の小説「意識」の一部を典拠に利用した本作は、反復／変形の方法が、澁澤の創作を研究する重要な観点となることの証左となろう。

続く第2・3章では、いわゆるサド裁判に注目する。当時、澁澤は、法廷の内外で独自の〈猥褻〉観を主張した。澁澤と同じく猥褻文書裁判（四畳半襖の下張裁判）の被告となった野坂昭如も、法的な定義とは異なる〈猥褻〉観をたびたび語っていた。第2章「澁澤龍彦の見たサド裁判（前）——〈猥褻〉をめぐる闘争——」では、両者の言説を対比的に勘案し、彼らがどのようにして自らの創作へと〈猥褻〉を組み入れていったのかに論及する。澁澤と野坂とは、いずれも〈猥褻〉を、性意識という個人的な感性に属する問題と捉え、法廷の内外で発信し続けていた。このような〈猥褻〉観を、根源的な人間の自由を宣言する、芸術的な主題として、両者は自らの創作に組み込んでいる。そして、澁澤は、限りなく観念的な課題として、一方の野坂は、直接的な体制批判の武器として、〈猥褻〉を語っていたのである。両者の相違も、一つの問題を語り直す方法であり、注視すべき問題であろう。

また、澁澤は、係争中にメディアなどで「反体制のアジテーター」と喧伝された。しかし、「反体制のアジテーター」は、必ずしも彼の意図するところではなく、サド裁判の渦中に発表された短編小説「エロティック革命」では、そのように語られた〈被告・澁澤龍彦〉像が反復／変形され、パロディ化される。第3章「澁澤龍彦の見たサド裁判（後）——自己戯画というパロディ——」では、第2章をふまえながら、同時代のアクチュアルな事象に組み込まれ利用されていく自己像をパロディ化し、批評の俎上に載せようとする澁澤の姿勢と方法とに迫りたい。

第1章「『唐草物語』の方法——作家・澁澤龍彦の〈私〉——」では、長く創作から離れていた澁澤が、約一七年ぶりに発表した連作短編小説『唐草物語』について考察する。澁澤自身、『唐草物語』の形態を〈小説と評論の合いの子〉と述べた。これは物語の幻想性を支えるために、博物学的な知識や文献的裏付けをとまなう考証によってリアリティを生成する試みであったといえる。さらに、語り手〈私〉に澁澤自身を作為的に重ね合わせるように見せかけることで、様式化された自らのエッセイや評論のスタイルを作品に照応させ、テキストを読者と共有するという方法を行っていたのがわかる。作家活動の後期に入り、澁澤が、過去のエッセイ等の自作を典拠として運用していく方法が、『唐草物語』からは明らかになるだろう。

翻案や引用を複合的に用いる澁澤龍彦の諸作品は、小説だけでなく、彼の作家活動の大半を担うエッセイや評論においても変わらない。典拠は、古今東西を問わず、複数を錯綜させ、自らを取り巻くアクチュアルな事象までも対象にしている。澁澤龍彦は、まさに反復／変形の多様性を体現した作家であり、したがって、第一部こそ、本研究の根幹といっても過言ではない。第一部で論じる対象は、〈私〉を擁する語りの構造を読むことまで

もが要請されるテキストである。すなわち、読み換え、書き換えを求める始原的な欲望や、その獨創性を、読者に対し、澁澤龍彦のテキストは喚起しているといえよう。批評性を帯びた差異自体をも読み取らせようというテキストの機構が、第一部では析出される。

第5章「反復／変形される『史実』——「ねむり姫」の虚構性——」は、第一部のまじめにも位置付けられる。「ねむり姫」には、さまざまなプレテキストが翻案、引用されている。特にそれは、中心的な登場人物である、珠名姫とつむじ丸の造型に顕著であり、なかでも、藤原定家の『明月記』の一節と『古今著聞集』の一節とを反復／変形し、接合した箇所が象徴的である。ここでは、元の文脈を書き換える（読み換える）反復／変形のプロセスが、小説の構造を形成している。その構造分析からは、典拠の歴史的な信憑性に基づくリアリティの担保と、「ねむり姫」における虚構性とが接続されていくメカニズムを看取できよう。「ねむり姫」は、引用や翻案の再構成（コラージュ）により、語り手の文脈に沿う状態でプレテキストが虚構化され、読者に歴史的な裏付けが共有されようとするテキストになっているのである。

本論第二部「典拠をめぐる方法」は、芥川龍之介、中村真一郎、太宰治、石川淳、三島由紀夫の作品のなかでも、古典文学や歴史を題材（典拠）としたものを対象に、反復／変形および方法としてのパロディを検討する。

芥川龍之介「六の宮の姫君」は、典拠と内容面での類似が指摘されてきたが、語る行為において、典拠への批評性をともなった差異が示されている。このような反復／変形のプロセスは、翻案文学研究へのアプローチにもなるだろう。とりわけ、作品全体で三一例と多用される逆接の接続詞は、物語内容の反転とねじれを繰り返す文脈を生成し、読書行為における期待の地平をはぐらかしていく。そのような語りを基盤とする「六の宮の姫君」は、類型的話形の解釈共同体内に埋没してしまいがちな個人の生をすくい上げ、原典となる『今昔物語集』に象徴される古典と近代小説との批評的な差異を浮き彫りにする。パロディとしての要素をももっているといえる。第6章「反復／変形の戦略性——芥川龍之介「六の宮の姫君」の方法から——」では、この作品の文体に焦点を当て、典拠運用のプロセスについて論じていく。

第7章は、中村真一郎が、第一高等学校在学中に付けていた日記と、当時彼が創作していた小説とを取り上げる。日記によれば、中村は、第一高等学校で発行されていた雑誌「向陵時報」に「和泉橋にて」という小説を発表している。これは、一高入学後に、中村が、初めて雑誌掲載された作品であり、唯一、「周知淳之介」の筆名で執筆された。中村の作品集にも未掲載である本作は、柳亭種彦を題材にし、昭和一〇年前後に流行した、文体や意識の流れまでもが意図され、作家を志す若き中村の意志が鮮やかに読み取れる作品でもある。同時期の日記には、近世文学や種彦近辺の書誌等に関する資料が列挙され、構想の痕跡が残されてもいた。日記から垣間見える中村の創作意識は、「和泉橋にて」の内容とともに、古典と現代との回路が、習作期の彼のなかでいかに開かれようとしていたかを探る手がかりになる。

第8・9章で論及する、太宰治「女の決闘」は、反復／変形を駆使した作品であり、特に第8章「パロディ化される文学史——太宰治「女の決闘」の起点——」は、第一部の澁澤龍彦論と同様に、本研究の中心的な課題となる。太宰の「女の決闘」では、ヘルベルト・オイレンベルグ作／森鷗外訳「女の決闘」が全文引用され、それに語り手が、批評を施し、

改変を加えていく。複雑なメタフィクション構造であり、多くの先行研究では、「十九世紀的リアリズムの否定」と論じられてきた。だが、この作品が、日本の近代文学史における森鷗外存在と、彼によって代表される近代小説の日本語表現、さらには「描写」を主とする自然主義的リアリズムや、その言表行為主体（私）への批評を内に孕んでいる点を見逃してはならない。また、発表媒体である「月刊文章」の性格とも、この作品は連動している。つまり、近代小説の機構や同時代の文学状況を批評し、小説化するという文学史に対するパロディになっているといえるのである。

第9章では、第8章を受けつつ「女の決闘」の研究史へと視点を変え、「十九世紀的リアリズムの否定」という文学史的なフレームを読み直す。この研究史は、昭和一〇年前後に表面化する、自然主義的リアリズムへの反動という文学史の側面を補填する形で編成されており、同時にそれは、「女の決闘」が、同時代の文学状況や近代小説の方法を視野に入れた作品であることを明らかにしよう。文学研究というメタ言説が生産／消費してきた、テクストの反復／変形の考察は、文学史叙述の可能性に言及する試みでもある。

第10・11・12章は、石川淳を対象とする。昭和一〇年前後には、しばしば「饒舌」な「説話（体）」という批評言説が見られる。石川淳の「普賢」の文体も、そのように批評された。しかし、「饒舌」と「説話」とは、使用者ごとに意味が揺らぎ、当時は語るという行為を指す程度の曖昧な術語であった。そこで、二つの言葉の意味を峻別し、方法としての「饒舌」「説話」の価値と必要性とを説いた高見順の発言を補助線として、第10章「饒舌」と「説話」——昭和一〇年代における〈私〉の「側面」——では、「しやべることば」と小説内で規定される「普賢」の語りを読み解く。「普賢」は、「しやべる」言葉と「書く」言葉とに対し、語り手「わたし」が自己言及を行い、言葉の限界を模索する過程をも語り出している。そして、語り手「わたし」は、登場人物などの関係性を定位していくのではなく、繰り返しそれを語り直し、転倒させることによって、言葉による〈現実〉の表象不可能性を浮き彫りにする。自然主義的客観描写の陥穽を穿つような文体の創造は、「饒舌」および「説話」に関する高見順の整理に基づく、語る主体としての〈私〉を中心化するテクストの構造から、あらためて論述できるだろう。

第11章「歴史」を語る方法論——石川淳「諸國崎人傳」への視角——でも、前章と同じく昭和一〇年代を出発点とする。昭和一〇年代、石川は、歴史をすでにあるものと捉える固定化された歴史認識を否定し、言表行為主体がいかにして歴史を紡いでいくかという態度の問題を評価していた。しかし、これは、戦前に限定される姿勢ではなく、戦後以降にも貫かれており、昭和三〇年一二月から「別冊文藝春秋」で連載が開始される、「諸國崎人傳」において、直接的に実践されたと考えられるのである。「普賢」では〈現実〉をいかに語るかに注目したが、「諸國崎人傳」では、対象が歴史（個人史）となる。二つの作品は、先行テクストを反復／変形し、新たな意味や価値を与えるプロセスと、語りの方法とにおいて通底するだろう。「諸國崎人傳」から看取できる、書きつつある現在の意識を可視化し、書く行為自体と結び合う主体を前景化する構造は、石川淳における森鷗外の史伝評価にも連関する観点である。

石川淳の「修羅」は、応仁の乱前後の京都を舞台とし、史実を踏まえながらリアリティを仮構しつつ、馬娘婚姻譚を典拠にして造形された胡魔を中心に据えている。そして、異類婚姻児という特異な出生を背景とし、共同体内で忌避される〈ヒメ〉としての性格もも

つ胡魔は、為政者によって編まれる歴史（史的資料）の破壊を目論む。いわば、固定化された歴史の否定が読み取れるのである。「現在」に拘泥する胡摩とともに、足軽や被差別民を中心に据えた「修羅」は、支配体制によって生成される〈史〉を否定する構造をもった作品といえる。周知の歴史を反復／変形し、独自の〈歴史〉を紡ごうとする「修羅」の根底に流れる力学は、石川の歴史文学批判や歴史をいかに語るかという方法論を想起させよう。第12章「石川淳「修羅」を統べる〈ヒメ〉——〈歴史〉を改変するための力学——」は、前二章を引き継ぎ、本研究における石川淳論の総合的な分析となる。

第13章「パロディを要請する志向——三島由紀夫「橋づくし」のエピグラフ——」では、三島由紀夫「橋づくし」が、近松門左衛門『心中天網島』の「名残の橋づくし」の一節をエピグラフに用い、パロディとしての読みを誘発している構造を論じる。「橋づくし」は、近代的な建築を背景としたコンクリート製の橋と、花柳界という衰微しつつある文化習俗に生きる登場人物との対照を主軸としている。「名残の橋づくし」の一節を引いたエピグラフは、滅び行くものへの美意識や、現実的には失われた橋の「詩趣」を鮮明に浮上させており、いわば、近代的な物語世界と、前近代（近世）的なイメージとを架橋する機能を有しているのである。同時に、エピグラフに見る反復／変形的作用について考察し、準拠の方法を多角的に論じていく視座を提示したい。

「六の宮の姫君」、「女の決闘」、石川淳の諸作品については、特に、澁澤論の方法を集約したアプローチでもあるが、日記を参照する中村真一郎論、エピグラフに注目する三島由紀夫論も、第一部の応用的な展開に相違ない。いずれも、元となったテキストのもつ意味や文脈を解体ないしは逸脱し、独自の創作へと反復／変形していく過程の論証となっている。澁澤龍彦以外の作家、作品を対象とした第二部において、近代小説における準拠の方法という本研究の射程は、より包括的な範囲に拡大できるはずである。

第三部「変奏される〈音楽〉」は、第一部と第二部との応用として、音楽を題材にした作品を取り上げる。音楽が言語化され、文学テキストとして反復／変形されていくプロセスを解明する試みは、これまでとは異なる角度から本研究を補完する役割を果たさだろう。

西洋の音楽家や楽曲名がまだ定着していなかった明治四〇年代において、永井荷風「新帰朝者日記」は、それらをアルファベット表記で統一し、母語の発音を理解しうる、日記の書き手「私」の「西洋崇拜」を表している。それと同時に、日本における洋学受容を通して、明治の急激な欧化政策批判をも展開する。なかでも、永井荷風「新帰朝者日記」に描かれている、語り手「私」がショパンの「ノクターン」などを演奏する場面は、日記体である本作において、ピアノの旋律を言語化していくかのような言説としても注目される。しかも、物語の後半では、日本古典と西洋音楽とを融合させたオペラの創作を「私」が試み、新しい西洋文化享受のあり方が示されようとしているのである。そこで、第14章「書き記された〈音楽〉——永井荷風「新帰朝者日記」と洋学受容——」では、日本における明治四〇年代の洋学受容とともに、語られる〈音楽〉の批評性を炙り出していく。

第15章「〈内部〉と交響する主題——福永武彦「私の内なる音楽」の批評性——」では、福永武彦による、シベリウスの「レンミンカイネン組曲」評価を整理し、彼のなかで音楽と文学とがどのように接続されていくかを探る。福永武彦は、「レンミンカイネン組曲」を、シベリウスがモチーフとしたフィンランドの英雄叙事詩『カレワラ』に基づき批評している。それは、最終章で『古事記』の一節と照応され、死と再生という「神話的主题」

を前景化するにいたる。これを「思いつき」の解釈とする福永は、音楽批評において、楽曲から喚起されるイメージを積極的に物語と接続し、いわば音楽を通じて自らの内部の文学的な主題を問い直そうとしているのである。聴くという行為の恣意性が批評自体をも創出している福永の「私の内なる音楽」からは、音楽と文学との交響する様態が感得できらるだろう。

最後に、第16章「吉田秀和と永井荷風との交差」では、吉田秀和の永井荷風論に言及する。吉田秀和は、「音楽的文明論」において、西洋と日本との音楽を架橋しようとする荷風の姿を浮かび上がらせている。吉田は、「模倣」「個性」をキーワードに、「音楽的文明論」発表現在でも技術面ばかりが重視されている表面的な「模倣」の傾向を糾弾する。つまり、吉田は、荷風の問題意識に自らを重ね合わせ、皮相の文明享受を批判し、精神性の解釈にまで及ぶ「本質的模倣」である、西洋と日本との音楽性が融合した作品の登場を評価しようとしているのである。荷風と自らとを交差させていく、吉田の言説を通して、彼らが目指したその「本質的模倣」を検討し、文学の領域で反復／変形される〈音楽〉の結論としたい。文学テキストが典拠に用いるのは、同類のテキストのみではない。第二部でも文学史や歴史叙述を題材に取り上げたが、音楽や絵画などの芸術、社会状況等、あらゆる事象が先行テキストになりうる。言葉へと反復／変形されていく〈音楽〉を分析的に読み直していく行為は、隣接領域と文学との隘路を開いていく契機にもなる。

リンダ・ハッチオンは、パロディの特徴を「類似よりも差異を際立たせる批評的距離を置いた反復」と述べたが、この意味において、反復／変形のプロセスにより生じた、典拠との差異から産出される批評性が、もつとも見えやすい形で表れていたのは、自己戯画の文脈を生成していた、濫澤龍彦「エロティック革命」と、近代文学史および同時代の文学状況の批評でもあった、太宰治「女の決闘」とであろう。だが、一口に批評性とはいえ、その尺度はさまざまである。そして、いかなる効果であろうと、読者の参与がなくては、批評性の発露も見られはしない。テキスト間を往還し、パロディの構造を読み取るうとする読者の存在は不可欠だ。だからこそ、本研究の目的は、反復／変形のプロセスに対する読者の積極的な介入を慫慂するところにもある。本研究全体を通じ、反復／変形のプロセスを読み解くという読者の主体性が要諦であると証明されるだろう。

(七九九七字)